新 仕事の周辺

青柳いづみこ（ピアニスト、エッセイスト）

作品そのものが音楽という文学

何年か前に著書二百冊刊行を祝ったフランス文学者の鹿島茂さんが、しみじみとこう語っていらしたことがある。なぜか左手で書いたような本のほうがよく売れるし、評価も高いんだよね。

わずかに十五冊を上梓したのみの私も、同じ思いを抱くことがある。さきごろ講談社エッセイ賞をいただいた『六本指のゴルトベルク』（岩波書店）などは、まさに左手の極だった。

古今東西の純文学やミステリーに出てくるクラシック音楽のシーンを手がかりに、作品を読みとく。あるいは、作品を道案内にして音楽の神秘や演奏家の秘密に迫る。

とにかく、ピアノのけいこを始めた四歳のころからクラシックにかかわっているのである。とりあげられている作曲家も作品も肌で知っているし、演奏家の道ゆきや特有の心理も手にとるようにわかる。私にとってこんなたやすい作業はない。

しかしいっぽうで、音楽家である私が文章を書くというのは、果たしてこういうことなのだろうかと自問自答することもある。

エッセイ集では—わかりにくくなるので—触れなかったが、実は、音楽や音楽家が主要テーマではない作品に強く音楽を感じることがある。

たとえば、オーストリアの作家ローベルト・ムージルの『愛の完成』という短編。作者の言葉を借りるなら、「心からの愛情が約二十四時間しか経っていないのに不貞に行きついてしまう道」を描いた作品である。

人妻が十三歳になる娘を預けている寄宿学校のある町に旅立つ。娘は最初の結婚の間にできた不倫の子で、その後さまざまな遍歴があり、現在の夫との出会いで心の平安を得たものの、旅立ちをきっかけに封印されていた過去がよみがえり、深いところの傷からさまざまな考えや感情がとめどなく湧きあがる。

明確な筋があるわけではなく、汽車に乗っている間の心理の動きをムージルらしい微細さで追っているのだが、ある思念からもうひとつの思念がするすると枝わかれし、からみあいながら、列車の振動や乗客の騒めきがひきおこす記憶や身体感覚を巻き込んでのびひろがるうち、まったく別のものに変容していくさまは、一編の交響詩を聴くようである。

それは、マラルメはじめ象徴派の詩人たちが、言葉のもつリズムやイントネーション、喚起力を駆使して組み上げようとした「音楽」とはまた違うあり方だ。

素材に依らずともそのものが音楽として成っている文学。この領域に踏み込んでようやく、私は音楽家にしか語りえないことを語りはじめるのではないかと、今はそんなふうに感じている。

＜あおやぎ・いづみこ＞昭和25年、東京都生まれ。フランス国立マルセイユ音楽院首席卒業。東京芸大大学院博士課程修了。平成2年、文化庁芸術祭賞受賞。先月、『六本指のゴルトベルク』で21年度講談社エッセイ賞受賞。著書に『ハカセ記念日のコンサート』など多数。祖父は仏文学者の青柳瑞穂。